

告 別 ・ ・ ・ ・ ・ 一 九 七 二 年 一 ・ 二 月

さむざむと冬の陽ざしはおとろえて 死への病いに臥し給う父

死に近きわが父なれど手をとれば やさしく笑みてわが子らを問う

死に近き父の手とればわが父の かけがえなさに涙あふるる

死に近き声なき父の手をとれば 極楽浄土よあらまほしけれ

みぞれ降る朝明け道を走ったり いまわのきわの父を呼びつつ

常総の吹雪く野面をディーゼルは あえぎ急げど父ははや亡し

頬こけて冷たき面に顔を当つれば 父の瞼にわが涙落つ

冷たきは父の額なり顔あてて その冷たきに永久の別れす

近所なる孤児(みなしご)の童女あわれなり 父の枕辺掌を合わせ哭く